

## Abstract

日米同盟の合理的選択論——理論の政策課題への適用の試みとして

福島 啓之（東京大学大学院総合文化研究科学術研究員）

本稿は、日本の安全保障の基軸である日米同盟を、国際政治理論の中でも近年発展を遂げてきた合理的選択論から導かれる知見を適用して分析する。合理的選択論は、利益最大化のための最適行動という単純で明快な考え方に基づく。その日米同盟の事例への適用を通じて、集団的自衛権の行使容認により複雑さを増すとみられる、日本の安全保障活動の体系的な理解を目指す。そのため、合理的選択論に基づく説明を出発点としつつ、その統合的な説明枠組みを考える。それは、日米同盟とその共同対処の対象となる標的国の三角関係に、日本の受動的、あるいは能動的な防御方式を組み合わせるものになる。説明枠組みからは、対立する近隣諸国との緊張緩和と、同盟国の米国との共同防衛、不安定な開発途上地域での国際貢献の関連性がうかがえる。さらに、米国との共同防衛と共同介入の間での取引の問題、それから取引が破綻したときの自主防衛と過剰拡大の間での二律背反の問題が浮かび上がる。

『国際安全保障』第44巻第4号（2017年3月）40—57 ページ。